

みどりの樹

第4号

2000 . 夏



— 附属博物館収蔵品 □ —

注口土器

最上郡大蔵村白須賀遺跡出土
縄文時代中期、大木八b式
高さ十四・〇cm、口径十二・五cm

注口土器は縄文土器の特徴である鉢形や壺形に、器内の液体をそそぎ出す注ぎ口をつけた代表的な器形の一つです。東北地方で製作が本格化するのには縄文中期に入ってからでした。大木式土器とよばれる日常の生活容器様式に、単に注口部をつけただけのものが多く出土していますが、写真の注口土器は筒形の注口部と口縁部について把手が一体化した特異な器形になっています。この液体を注ぐには非機能的な器形が、呪術や信仰の場で使われたことを想像させます。縄目の文様が土器全体にまた、渦巻き文の沈線が口縁部だけでなく胴体部にも描かれています。

(附属博物館長 中川 重)

工学部は三学科から六学科へ

奥山克郎



おくやま かつろう

山形大学工学部長
専門：半導体工学

工学部は、これまで「物質工学科」、「機械システム工学科」及び「電子情報工学科」の三つの大学科で構成されておりました。平成十二年度から、機能高分子工学科、「物質化学工学科」、「機械システム工学科」、「電気電子工学科」、「情報科学科」及び「応用生命システム工学科」の六つの中規模学科に改組いたしました。この時期に、なぜ工学部は、このような学科改組を考えたのでしょうか。

第一は、高校生や市民の方々が、学科名から判断してその中味が分かりやすい学科にしたいと考えたからです。そうすることによって、入学を志願する受験生が、自分の興味のある専門分野を選択しやすくなるでしょう。これまでの大学科ですと、専門分野が大きく括つてあるため、入学してから自分が学びたいと思つた専門の内容と、実際学ぶ内容とのミスマッチが起こることがあり、このため勉学意欲を

失うといった困つた事態もしばしば見られたのです。第二は、専門科目のクラス規模が小さくなるためより木目細かい教育指導が行いやすくなり、より分かりやすい授業や効果的な実験実習ができると考えたからです。

第三は、中規模の学科とすることにより、同じ学科に所属する学生諸君の仲間意識の向上と、学科への帰属意識を高め、学生諸君同志が切磋琢磨しやすい環境にしたかったためです。これまでの大学科では、一学科あたりの学生定員が多いため、同じ学科の仲間の名前を卒業まで覚えきれなかったというような不幸な事態も起こり得たのです。これでは学生諸君同志の仲間意識が希薄になりますし、ましてや教職員との交流は容易ではありませんでした。私達は、これを改善したいと考えました。

工学部は、自然科学を基礎にして、人間社会に有用な様々なモノやシステムを構築していく学問を教養し研究していく所です。私達は、入学志願者には、自分の興味のある専門分野をまず選んでもらい、明確な入学動機を持って入学してきてほしいと思っています。そのような入学者の勉学意欲を刺激し、入学者の期待に応えられるような分かりやすく興味深い授業を工夫して、専門分野の基礎をしっかりと身につけた人材を育てていくこと、このために努力するのが私達の努めです。そして、学生諸君には、専門性と同時に、クラスの仲間や教職員との交流、サークル活動などを通して、豊かな人間性と熱い友情を

培つていってほしいと考えています。今回の三大学科から六学科への改組は、主としてこのような観点からなされたものです。

残念なことに、山形県出身者の工学部志願者に占める割合は極めて低く、Aコースでは十三パーセントに達していません。どうぞ地元の工学部を見直してください。志ある県内の若人の入学を待っております。



工学部キャンパス風景



人間理解の新しい領域 「発達臨床心理学」

末 廣 晃 二

現代は人生八十年の時代と言われています。人の生涯は出生から死に至るまで、それぞれ新しい成長の可能性をもった段階の連続であると同時に、成長のための発達課題、つまり、ライフステージの各段階で直面し取り組むべき個々人のテーマがあると言われます。また、発達には危機が伴うという考え方は、一九五〇年代頃からアメリカの精神分析学者、



指絵とコラージュを通して「死と再生のテーマ」を体験学習するファンタジーグループ

Eriksonによって提唱され知られるようになってきたのですが、戦後五十年を過ぎて最近のわが国では、生活様式の変化とも相まって、個人の成長のそれぞれの段階で直面する危機的状況に対応し、適応回復のための援助活動ができる「こころ」の専門家が求められる時代になっています。

キレる子ども、教室に入れない子どもの問題が家庭や学校で子どもの指導に当たる親や教師の悩みと なっており、色々と苦労が語られています。

中・高校生をはじめ、いわゆる思春期の青年の間では、いじめ、不登校、更には、昨今の連続する動機不透明な凶悪事件等々の問題がマスコミを駆け巡っていることも御承知のとおりです。このような事件が発生すると一般社会の人々は、やれ教育が悪いだの、家庭が問題だのと起こった出来事に関連して見当違いの犯人探しをしがちですが、心身共に子どもから大人へと成長して行く青年期の子どもこのころの中を理解するのは、それほど容易なことではありません。「人生不可解なり」と断じて華嚴の滝に身を投じた旧制一高生のエピソードは、青年期の代表的な「苦悩」として取り上げられることは、よく御存知のとおりです。また、昔話や童話の中には「眠りや死と再生のテーマ」が繰り返して語られていて子どもたちはそのような物語を心の成長の糧にして現実の自分と世界の関係を構築して行くと考えられ

ます。現在の子どもの心の中にも、生と死のテーマ」は、子どもから大人への通り道として避けて通れない存在となつてはいるはずですが、「象徴的な死」が不登校や引きこもりだと見ることもできませんし、極端な形で突出したものが最近の事件だとも言うことができません。誤解のないように言つたのですが、ここでは自殺や人を殺すことを容認しているのではないのは当然のことです。新しい臨床心理学の分野では、このような子どもたちの心を読み解く鍵を実践的な事例から昔話や童話の世界まで、広い視野に広げて研究しようとしています。

教育学部生涯教育課程の発達臨床教育コースは、人間の発達や心の理解に関心を持つ若い人たちが臨床心理学を中心として幅広く学習することのできる場を目指して平成十一年度からスタートした新課程のコースです。将来、臨床心理学を生かした援助的専門業務に携わることを目指す学生とともに歩くことを第一に、体験学習や実習を積極的に取り入れた学習を展開しようと考えています。



すえひろ こうじ

山形大学教育学部教授
専門：臨床心理学

紅花と全国商業 東北の玄関としての山形

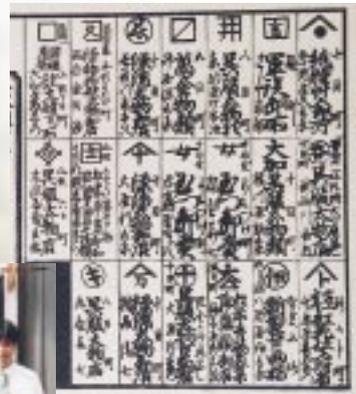
岩田 浩太郎

江戸時代〜明治前期に山形は「東北の玄関」としての役割を果たしていたのではないかと。最近、経済史研究を進めるなかで、このような思いを強くしています。

秋田でみつけた新史料

一昨年夏に秋田に調査にいき、新史料をみつめました。幕末の嘉永年間（一八四八〜一八五三）に今大屋佐藤利兵衛家（現佐藤利兵衛家）や三浦権四郎家（現三浦新家）など、当時の著名な山形城下町商人が秋田藩領（現秋田県域）で紅花を買い付けて出荷していたことを示す史料です（那波家文書）。山形市十日町佐藤家に所蔵されている古文書を調査させていただいた時には、同家の秋田での紅花集荷の事実は確認できませんでしたが、大変に興味を持ちました。また、従来の研究でも秋田における紅花集荷や取引の実態はほとんど不明だったので、一つの発見となりました。

佐藤・三浦両家が紅花を買い付けたのは、能代町・秋田郡五十目村（現五城目町）・横手町・平鹿郡泉村（現十文字町）・湯沢町などです。これらは能代平野・秋田平野・横手盆地において当時それぞれ流通の拠点であった町場や村であり、秋田藩領の広汎な地域で紅花生産がおこなわれていたことが判明します。山形城下町商人は遠く離れたこれらの町村に入



「東講商人鑑」
山形城下町商人の一部



佐藤利兵衛氏（中央）と
調査団（1995年夏）

り込み紅花を買い付け、それぞれ、近くの能代湊・土崎湊から上方へ出荷したり、あるいは羽州街道を南下して院内を経由して大石田まで運び、最上川を舟で下して酒田湊から北前船に船積みして上方まで出荷していたのです。

東北にひろがる紅花ネットワーク

佐藤家・三浦家や長長谷川吉郎次家・谷長谷川吉内家といった大きな山形城下町商人が、羽州村山・



いわた こうたろう

山形大学人文学部助教授
専門：日本経済史
日本近世史

置賜・庄内地方（現山形県）はもちろんです、奥州郡山（現福島県）、あるいは奥州村田などの南仙地方や奥州金成などの奥仙地方（現宮城県）、さらには奥州盛岡・黒沢尻などの南部地方（現岩手県）、常州水戸（現茨城県）などから紅花を手広く買い付けていたことはこれまでに確認できています。秋田調査での発見も加えると、山形城下町商人のトップクラスは現在の青森県域を除く東北全域および北関東の一部に進出し紅花を集荷していたことが明確になったといえます。また、例えば堀米四郎兵衛家（現山形県西村山郡河北町沢畑・同町立紅花資料館）が奥州村田（現宮城県村田町）から紅花を買い付けたり、渡辺喜助家（大石田町の大地主）が奥仙・南部地方から紅花を集荷していたことを最近確認しましたが、村山郡の豪農クラスも県外からの紅花集荷を実施していました。こうした事例発掘の積み重ねにより、江戸時代後期に紅花生産が村山地方以外で盛んになったことに対応して、多数の山形城下町商人や豪農が東北各地に入り込んで現地の生産者や集荷商人に資金



早朝の紅花つみ

融通をおこない、紅花取引のネットワークを築き上げていたことが浮き彫りになってきたのです。

急成長した山形城下町商人

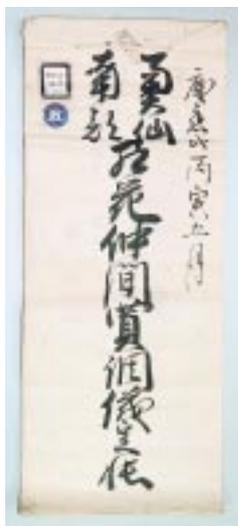
一方、江戸時代の山形商業の特徴としては「のこぎり商い」を指摘できます。紅花を京都や大坂に運んで販売した後、その代金で上方商品（呉服・織物・古着・木綿・畳表・扇子・雛人形など）を購入し山形へ運んで売りさばくという商法です。鋸の刃が行き来するように行きも帰りも両方で儲けることからこのように命名されています。

山形城下三日町商人であった糸 小嶋源兵衛家（現小嶋伊三郎家、小嶋家一族の名家）の古文書を分析すると、幕末期に小嶋家が上方商品を山形城下町人や周辺農民に販売するだけでなく、七ヶ宿を越えて遠く奥州伊達郡（現福島県北部）に運び大量に売りさばき、経営を急成長させたことが確認できます。

また、先にふれた三浦家は秋田や仙台方面へ、山形十日町の吉田利八家も仙台方面へ、庶民衣料として需要の高かった古着などの上方商品を手広く販売しました。山形城下町商人は「のこぎり商い」で得た上方商品を活発に東北各地に販売し、幕末期に経営を発展させたことが確認できるのです。

上方商品の販売ネットワーク

これまでの豪農クラスの研究では、紅花取引のネットワークが同時に帰り荷である上方商品の販売網の一つとして活用されていたことを検証しています。山形城下町商人の場合も東北各地に上方商品を販売することができたのは、紅花取引のネットワークを広域的に築いていたことが大きな前提となっていたと考えられます。冒頭で、三浦家が秋田で紅花取引のネットワークを築いていたことにもふれましたが、同家の東北各地への上方商品販売網の実態について、機会があれば研究してみたいと考えています。

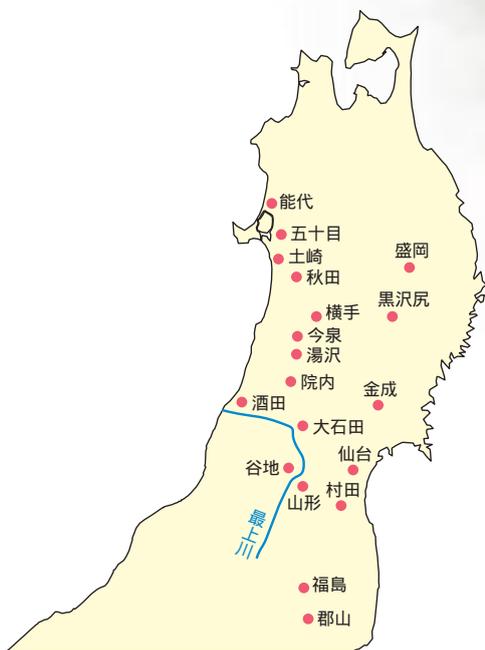


奥仙南部紅花仲間買調儀定帳
(渡辺家文書 附属図書館蔵)

東北の玄関としての山形

当時、上方商品の流通は太平洋海運よりも、北前船で日本海を輸送するルートの方が安全で主流でした。そして、紅花取引を通じてネットワークを上方と東北各地との間に築いていた山形商人は、日本海側の他の東北商人よりも、上方商品を手し販売するのにも有利な地位を築いていたのではないかと考えているのです。東北内陸部を中心に上方商品を売りさばく中継商業地として山形が繁栄した秘密は、ここにあると考えています。

現在と交通体系のあり方が異なる江戸時代、明治前期において、上方商品を入り出す「東北の玄関」としての地位を山形はもっていたのではないかと。この視点から、あらたな歴史像を検討しています。今後さらに全国的に史料調査を続け、研究を進めたいと考えています。

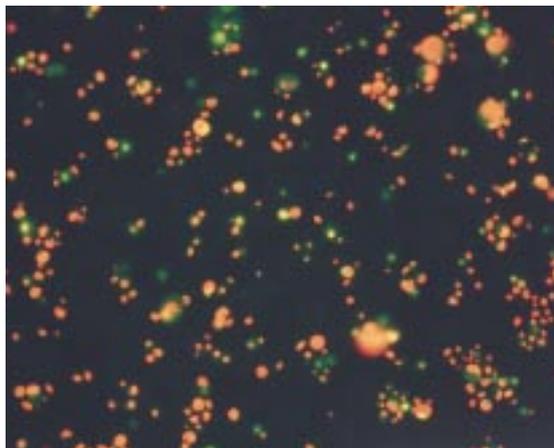


「みずうみ」と「湖沼」のお話

日野 修次

「みずうみ」、あるいは「湖沼」、この言葉を聞いて皆さんは、何を思うでしょうか？ あるいは、何を感ずるでしょうか？ 山の中の静かでない場所を思い浮かべる人、なにやらロマンを感じる人、遠き昔を思い出す人、あるいはネツシーのように怪獣を思い浮かべる人、様々だと思います。でも、水を思い出す人、そしてその中にすむ生物、特に微生物のことを思い出す人は、あまりいないかも知れません。

私は、湖沼内にすむ生物、特にプランクトンや細菌類などの微細な生物にロマンを感じています。例えば、阿寒湖。この湖は、見事な球形のマリモが生



水中の微生物（蛍光顕微鏡撮影）、一つ一つが微生物の体で、サイズは1mmの100分の1です。

育する湖沼ですが、マリモ以外にも様々な生物が住んでいます（むしろ、マリモよりも他の生物の方が数のうえでは圧倒的に多いのですが）。これらの生物は、単独で生活していることはあまりなく、他の生物と共存（あるいは競争）しながら生きています。いわば、水の中で小さなコミュニティを形成しているといえるでしょう。それぞれの生物が、影響しあいながら共存していき、そのなかで最も強い生物がシステム（生態系）の頂点に立ちます。私たちが湖沼で魚食性の魚（サケ科の魚など）を釣ったということは、その魚がほかの生物を食べて大きくなったものを、さらに人間が利用しようとしていることを表しています。

私たちは、人間と湖沼のつながりを意識して、「どのように利用したらよいか」、また、「どのようにしたら湖を汚さずに利用できるのか」について考える必要があります。全くの山奥にある湖沼ならいざ知らず、私たちは湖沼のそばに住み、その中にすむ魚を食べ、そしてその水を利用しながら湖沼と共存しようとしています。人間が勝手に改変すれば、その報いは必ず表れます。例えば、水草がたくさんあるはずの岸辺をなくせば、そこに棲むはずの生物がいなくなったりします。この中には、いわゆる絶滅危惧種（地球上からいなくなる可能性のある生物種）といわれるものもあります。



ひの しゅうじ

山形大学理学部助教授
専門：微生物生態学
生物地球化学
環境科学

私たちは、湖岸で水遊びをしたり、ボート遊びをしたりしますが、その水面下で様々な生物がお互いに生き続けようとしていること、そして、その恩恵を我々が直接的、間接的に受けていることを少し思い出していただければ、と思います。また、サイエンスとはやや離れたロマンの世界が感じられる「みずうみ」というきれいな言葉も残していけるようにしたいと思っています。それでは、皆さん、どこかの「みずうみ」や「湖沼」のほとりでお会いしましょう。



特別天然記念物「阿寒湖のマリモ」
(阿寒町教育委員会)

国際交流

タイ国立 カセサート大学 附属学校からの 高校生受入れ

高木裕子

アーリー・エクスプोजャーの推進。これは昨年、文部省の設置した留学生政策懇談会がまとめた『知的国際貢献の発展と新たな留学生政策の展開を目指して』ポスト二〇〇〇年の留学生政策』の中で示された提言です。早めの日本体験とでも訳したらよいのでしょうか。二十一世紀に向けた日本の知的国際貢献の在り方として、優れた留学生を日本へ引きつけるために、年少の頃こどもから日本への留学に対する興味や関心を高め、将来日本を留学先として選んでもらおうというのがこの主旨です。このような提言がされるに至った背景には、それまで順調に伸びてきた留学生数が平成八年初めて減少に転じたことが挙げられます。何とかこの留学生数を目標の十万人にまで伸ばしたい、これに対して一層の取組みを求めたのが本報告書です。ところで、今春、山形大学教育学部はこのアーリー・エクスプोजャーの推進に寄与する事業として、国立大学としては初めてタイ国立カセサート大学附属学校から高校生六名と引率教員二名を一ヶ月間受け入れました。国立大学が

このようなかたちで海外から高校生を受け入れるのは全国初のことですが、高校生が日本の大学で日本語や日本文化について学びながら、地域との交流やホームステイ体験を通じて、日本社会や文化を体験していくというのも初めてです。本学でこれが実現できたのは、まず教育学部に先のタイの学校から教員研修生（国費）が来たことがきっかけです。その後、やはり同校部の日本語教育専攻の大学院生がタイの学校へ日本語指導で出向くことになり、そのような交流の積み重ねの中で日本語を専攻している高校生を日本へ送りたいという話が出てきました。今回来形したのはタイの学校で日本語を学んでいる高校一年生です。タイでは平成十年から大学入試に日本語が第二外国語として選択されました。これにより高校生でも日本語を学ぶ必要性が出てきたわけ



県下学校での交流風景

です。また、タイではかねてより日本との関わりから、とりわけ若い世代では漫画や音楽等を通じての日本への興味や関心は高まっています。彼らが来形した四月中旬は春が始まったばかりで肌寒さを感じる程でしたが、一ヶ月の間に季節は春から初夏を思わせる時期へと変わり、この時期の山形は最も美しくかつたはずで、目くるめく季節の中で、彼らは県知事と山形市長を表敬訪問、本学長や学部長とも懇談したり、また、県下小・中・高校では活発な交流を行い、ホームステイでは多くの貴重な体験をさせていただけました。今後の留学生施策として重要なのは、大学変革の中、世界に開かれた留学生制度を確立する、官民一体となった留学生支援の充実を図ることだと言われています。本事業を通じ、これら必要性を実感しない日はありませんでした。本事業が本学で成功のうちに無事終了されたのは、偏ひとへに地域の皆様をはじめ、地方公共団体、民間団体の協力なくしてはなかったと信じています。ありがとうございました。



たかぎ ひろこ

山形大学教育学部助教授
専門：日本語教育学

山形大学附属博物館



附属博物館は、本学教育学部の前身山形師範学校¹の郷土室が、昭和初期から連続と引き継がれ、昭和二十七年に文部省から博物館相当施設として指定され、大学の附属博物館として現在に至っています。

人文科学・自然科学両分野の資料を有する総合博物館ですが、特に歴史・民俗資料が充実し、近世地方文書を中心とした古文書資料も三万点近く整理され、所蔵しています。

常設展示・古文書資料とも、学外の一般の方も見学・閲覧していただくことができますので御利用ください。常設展示のほかにも一般市民対象の公開講座の開催、特別のテーマに沿った特別展の開催等の事業も行っています。

利用案内

・場所 山形大学小白川キャンパス

附属図書館三階

TEL 〇三三 六二八 四九三〇

・開館時間 午前九時～午後五時

・休館日 土曜・日曜・祝日・年末年始

・入館料 無料

・入館方法 図書館一階のカウンターで博物館利用の旨をお伝えください。

* 博物館の詳細はホームページでもご覧いただけます。
http://klib33.kj.yamagata-u.ac.jp/museum/index.html

山形大学各種催事案内 (平成12年7月から9月まで)

1 公開講座

- (1) 「21世紀版午後のサイエンス」(理学部) <日程変更のお知らせ>
開催期間・場所: 6/24(土) 7/15(土) 山形市理学部
受講対象者: 一般市民・高校生 180人
受講料: 一般 2,000円、高校生 500円
- (2) 「プラスチックの見分け方、使い方、リサイクルの仕方、捨て方」(工学部)
私たちの快適な社会生活に大きく貢献しているプラスチックに対する正しい知識・技術を易しく紹介します。
開催期間・場所: 9月の土曜日4日間を予定 米沢市工学部
受講対象者: 一般市民及びプラスチック工業技術者 50人
受講料: 5,500円
- (3) 「おいしく楽しい環境講座 - 庄内の環境への取り組みから学ぶ - 」(農学部)
環境情報管理、水をめぐる環境、食と農をめぐる環境の課題で、講義と実践活動の実際につれて知見を深めます。
開催期間: 9/22(金) 9/23(土) 9/30(土) 3日間
開催場所: 鶴岡市・遊佐町・酒田市
受講対象者: 一般市民 45人 受講料: 6,500円
- (4) 「愛と性の博物館」(附属博物館)
表現の問題としての愛と性、文学・美術・生物学・法学等多様な分野から考察・議論します。
開催期間: 10/7(土)～10/21(土) 毎週土曜日 3日間
開催場所: 山形市附属博物館
受講対象者: 一般市民 30人 受講料: 5,500円

2 学部説明会・体験入学

- (1) 学部説明会(対象者は高校生、場所は各キャンパス)
人文学部、教育学部、理学部 9/9(土)
医学部、工学部、農学部 8/4(金)
- (2) 体験入学(場所は各キャンパス)
理学部(物質生命化学科) 7/23(日) 中学生・高校生、教諭対象
理学部(数理科学科・地球環境学科) 9/9(土) 高校生対象
工学部(1泊2日コース(指定日)・半日コース(随時))
第期 7/10(月)～7/18(火) 第期 10/2(月)～11/30(木)
毎日(火・土・日・祝日を除く) 高校生、編入希望の高専生、教諭対象

3 入学試験

- (1) 工学部3年次編入学(Bコース) 9/1(金) 米沢市工学部
- (2) 農学部3年次編入学 7/8(土) 鶴岡市農学部
- (3) 大学院社会文化システム研究科 9/30(土) 山形市人文学部
- (4) 大学院教育学研究科 8/22(火) 山形市教育学部
- (5) 大学院医学系研究科(医学専攻) 9/14(木) 山形市医学部
- (6) 大学院医学系研究科(看護学専攻) 9/7(木) 山形市医学部
- (7) 大学院理工学研究科(理学系) 博士前期課程 山形市理学部
一般 9/4(月)・9/5(火) 社会人 9/5(火) 外国人留学生 9/5(火)
- (8) 大学院理工学研究科(工学系) 博士前期課程 米沢市工学部
一般 8/21(月)・8/22(火) 推薦 8/1(火) 社会人 8/21(月) 外国人留学生 8/22(火)
- (9) 大学院理工学研究科(工学系) 博士前期課程(平成12年秋入学)
一般 8/21(月)・8/22(火) 社会人 8/21(月) 外国人留学生 8/22(火)

4 リカレント教育推進事業

- (1) 「東アジアからの越境大気酸性化物質の動態解析」
開催期間: 7/18(火) 7/19(水) 7/25(火)
開催場所: 山形県環境保全センター
受講対象者: 酸性雨の実務経験者 20人 受講料: 無料
- (2) 「救急医療 三次救急の最先端」
開催期間: 9/16(土)～10/21(土) 毎週土曜日全6日間
開催場所: 山形市医学部
受講対象者: 医師・医療技術者・看護職 50人 受講料: 8,500円
- (3) 「21世紀の食糧 - 生産の崩壊・品質の変貌・安全性・環境汚染 - 」
開催期間: 10/7(土)～11/18(土) 11/4を除く毎週土曜日6日間
開催場所: 鶴岡市農学部
受講対象者: 一般消費者・小中高教諭・食品販売業者 50人 受講料: 8,500円

5 大学開放推進事業等

「あしたは月食 講習会」- 月食の楽しみ方、教えます -
7/15(土) 山形市理学部(月食の当日(7/16)は、晴れれば観測会も実施予定)

6 講演会・その他

- ・看護職員採用試験 9/24(日) 山形市医学部
- ・日本地球化学会 9/25(月)～9/27(水) 山形市小白川キャンパス

お問い合わせは、山形大学庶務部庶務課文書広報係まで(023-628-4039)

編集後記

立場上か世相を肌で感じる時があります。自殺の増加、犯罪の低年齢化と凶悪化、賠償問題のこじれた交通事故、労災がらみの事故等々、おそらく山形とて例外ではないような気が

します。マスコミ報道の価値は認めますが、あまりに大きな抜いて人心をありとてしているだけではないかと思わされることでもあります。節度を保つことは難しく、どうしても極端な方向へ走ってしまう傾向があるのはこの世の常なのかもしれません。社会全体の雰囲気のようなものが、必要以上にその暗部を増大し顕在化していなければ良いかと危惧します。さて私こと医学部に赴任してきて一年になるうといっています。前任地が私立大学だったせいから多少の違いを感じます。学生に対しては、国立大学は良くも悪くも放任主義、私立大学は細かな指導といった傾向があります。現代の学生には後者の方が向いている人が多いような気がします。それなりに学費もかかります。国際化と少子化の流れの中、大学間の競争は激化する一方です。この広報誌が、地域社会の本学に対する理解と評価に結び付けばと願う理由です。

「みどり樹」編集委員会委員 大澤 資樹

「みどり樹」に対するご意見・ご質問等を、お気軽にお寄せください。お寄せいただいたご質問等には、本紙面に「皆様からのQ&A」コーナーを設けてお答えさせていただきます。

〒990-8560
山形市小白川町1丁目4-12
山形大学庶務部庶務課文書広報係
TEL 023-628-4039
FAX 023-628-4013
Eメール syobun@kbureau.kj.yamagata-u.ac.jp

この「みどり樹」は、山形大学ホームページの「お知らせ/催事案内」でもご覧になれます。
アドレス <http://www.yamagata-u.ac.jp>

「みどり樹」は、3月・6月・9月・12月に発行する予定です。



この印刷物は再生紙を使用しています。